

## 【講演】「図書館で変わる！地域が変わる！ ～ソーシャルイノベーションに向けて」

(太田)

それでは「図書館で変わる！地域が変わる！ ～ソーシャルイノベーションに向けて」ということで、お話しさせていただきます。

まず、この映像ですが、私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」が、ソフト関係を全部コーディネートして、昨年7月にオープンした茂木町の、「ふみの森もてぎ」という新しい図書館がオープンする3ヶ月くらい前です。建築設計は龍環境計画さんが地元の木材をふんだんに使った素晴らしい建築をつくってくれたのですが、私たちはその中身をフルコーディネートしました。この映像は、なにをしているかという、もともと茂木町には図書館がなくて小さな図書室があったのです。その図書室から、普通は業者さんをお願いして蔵書をトラックに積んで引っ越しをするのですが、だいたい古い図書室から新しい図書館の間って400mくらいなのですが、町民を350人集めまして、一列に並んでいただいて、全部手渡しで引っ越ししました。これが私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」の考え方を、とてもよく象徴していると思うので、講演会などでいつもお見せしています。これは業者さんをお願いしてお金を払えば済む話ですよ。私はもともと引っ越し屋で4年くらい働いた経験がありまして、数千冊の本の引っ越しはあっという間ですよ。それこそ2トン車1台あれば入ってしまう。それをこうやって1冊ずつ350人の手で、みていただければわかるように、本当に老若男女、最後のほうには車いすの方々も並んでいらっしゃいますが、なかには図書室を使ったことないという人も多いわけです。

この時運んだのは2,000冊くらいですが、一冊一冊、350人の町民が蔵書を手にする。しかもこの400mの道路は、茂木町のかつての中心商店街で、今はすっかり閑古鳥といますか、ただ、ちょっとおもしろい商店街で、シャッター街ではない。店は開いているのですが、人の気配がない(笑)。だから、このなかには店番していたおばあちゃんが「なんだ？なんだ？」と出てきて、「お祭り以外で、こんなにこの商店街が賑わったのは何十年ぶりだ！」って泣いていたりして。これはまだ直接経済化するわけではないのですが、私はこういう事を一つ一つ積み重ねて起こしていくことが、ソーシャルイノベーションにつながるのかなと思っています。ちょうど今、青いベストの人たちは、地元の信用金庫の方々ですが、こういう地元の企業さんも人を出してくれたり、あるいは、この時来てくれた皆さんに地元の和菓子屋さんの協力でお土産を用意するとか、いろいろな“つながり”が生まれていきます。なんとなくソーシャルイノベーションというとなんか難しそうですが、それまで業者に頼んで、お金で解決していたような事でも、ちょっと考え方を換えれば、なにかがスタートができるのではないのかなと思っています。

では、今日は「図書館で変わる！地域が変わる！」ということで、お手元にお配りした資料は、写真などはプリントしていないので数枚ですが、用意したPowerPointは120枚あって、45分しかないので急がないといけない(笑)。最初にお手元の資料の裏側にある私のプロフィールをみていただき(図3参照)、私がどういう立場の人間かっていうのをざっとご説明しますと、もともと高校の先生でした。大学の専門は昆虫で、農学部の応用昆虫学です。その流れで生物の先生を3年半ほどして、松岡正剛さんが所長の編集工学研究所に入りました。そこから23年、このプロフィールに載せているのは、主にまちづくり、地域関係のお仕事だけをピックアップしていますが、これ以外にも民間ですと、例えば東京ディズニーランドさんの2020年計画とか、HONDAさんの新しい事業プランとか、NTTさんのグループCMをつくるとか、編集工学を応用して、いろいろなお仕事を経験してきました。で、ちょうど5年くらい前です

か、暖簾分けといいますか、編集工学機動隊 GEAR として独立しました。その最初のお仕事は、ミャンマーのジャングルに入って戦場カメラマンのような (笑)。ミャンマーでは、今、ロヒンギャが問題になっていますが、ミャンマーには少数民族が 130 以上あって、そのうち少数民族武装勢力といわれる民族が 11 もあって、政府軍と戦っているのです。そういう武装勢力の根拠地について撮影をするような仕事をしている時に、北海道の幕別町図書館の館長さんから、どうも腑に落ちないことがあると相談いただいたのが図書館との関わりの始まりです。なので私は、図書館の専門家でもなんでもないの、お話を聞いていらっしゃる方のなかには専門の方もいて、こいつなについてんだっと思う方もいらっしゃるかと思いますが、こういう来歴だと言うことでご容赦いただければ幸いです (笑)。

## 太田剛プロフィール

- 編集工学機動隊 GEAR 代表
- 図書館と地域をむすぶ協議会 チーフディレクター
- 慶應義塾大学講師 (ネットワークコミュニケーション実践)

■ 1965年和歌山市生まれ/茨城県潮来市出身。明治大学(農学部応用昆虫学)卒。高校理科教師等を経て、1990年編集工学研究所(松岡正剛所長)に入社。映像から雑誌・書籍のメディア制作、文化イベント企画・施行、企業の事業戦略から自治体の観光戦略・町おこし、各種システム研究・開発など、編集工学を応用した企画・制作・研究・開発全般を担う GEAR 事業部を統括する。

■ とくにメディアミックスした自治体の IT 戦略・観光戦略と地域づくりを複合したプロジェクトを数多く手がけ、地域コンテンツの掘り起こしと編集人材の育成を核とした「編集」による地域活性化のアプローチには定評がある。また、1995年より金子郁容(慶應大学教授)らと地域 ICT 利活用の数々の実証実験プロジェクトを推進し、藤沢市市民電子会議室、岐阜県情報化戦略ほか、ICT を活用した地域活性化のスペシャリストとして各種事業に参画する。2008年より慶應義塾大学(SPC)にて、ネットワークコミュニケーション実践を教える。

■ 図書館および読書空間関連では、松岡正剛と共に20年以上にわたり図書館プロジェクト(NICT+総務省)や松丸本舗(丸善)はじめ、日本の書籍・読書・出版・図書館等、国内外の書籍と読書に關係する多様なプロジェクトのチーフ・ディレクターとして活躍する。

■ 2010年よりネット上のハイブリッド書店「honto」(大日本印刷/CHIグループ)の立ち上げに、コンテンツDB統括リーダーとして参加。さらに全国の図書館の書誌DBと管理システムを徹底して調査・研究しながら、国民読書年関連プロジェクト等に参画する。

■ 2012年に株式会社ギア(編集工学機動隊 GEAR)を設立。松岡正剛事務所・編集工学研究所と連携しながら、日本財団とのプロジェクトでは世界18カ国を含む国内外の各地に活動の輪を広げる。2013年より幕別町図書館(北海道)改革で全国的な注目を集め、「図書館と地域をむすぶ協議会」を設立。新図書館建設やリニューアル、システム改修事業など、図書館と地域の関係を再編集する数々のプロジェクトを実践、またはアドバイザー、講演などで全国を飛び回っている。

◎業務経歴(地域および図書館関連プロジェクト中心に主なものを抜粋)

- 図書館プロジェクト開発リーダー(NICT+総務省+慶應義塾大学)
- 歴象探索型システムプロジェクト開発リーダー(経産省+慶應義塾大学)
- 述語検索型資料管理システム開発(外務省)
- 国民読書年プロジェクト読書SNSチーフディレクター(文部科学省+大日本印刷)
- 理科教材管理・編集・配信システム開発リーダー(文部科学省)
- 災害時におけるネットワークサービス相互接続研究会(経産省)
- ネットワークコミュニティ研究プロジェクト(ニフティ)
- 総務省「ICT住民参画研究会」(座長:石井威望)WG委員
- ネット書店「honto」コンテンツDB統括リーダー(大日本印刷/CHIグループ)
- 仮想本棚SNSサービス「本座」チーフディレクター(編集工学研究所)
- 「松丸本舗」プロジェクトプランナー(丸善+大日本印刷/CHIグループ)
- 全国市町村アカデミー講師「ITと市民コミュニティ」
- コンテンツ配信標準化委員会委員(日本規格協会)
- 京都デジタルアーカイブ チーフディレクター(総務省・京都市)
- 札幌市地域文化資産デジタルアーカイブ構築業務(札幌市)
- 岐阜県情報化戦略および観光戦略作成業務(岐阜県)
- 岐阜県デジタルアーカイブ企画制作(岐阜県)
- 住民参加型教育コンテンツ流通実験(箕面市・岡山市・総務省)
- 金沢市学習プラットフォーム構築実験(NTTコム・金沢市・総務省)
- 金沢市文化芸術振興プラン策定業務(金沢市)
- 地域ICTシステム開発・運用支援(藤沢市・札幌市・洲本市・狛江市ほか)
- 地域SNS市民記者養成プロジェクト(静岡県浜松市・埼玉県秩父市)
- 岡崎市新美術館設立事業映像ディレクター(愛知県岡崎市)
- 平城運都1300年記念「NARASIAプロジェクト」映像・ICTシステムディレクター(奈良県)
- 国際ハンセン病制圧活動/ミャンマー少数民族武装勢力映像記録ディレクター(日本財団)
- 幕別町図書館システム改修プロジェクト チーフディレクター(北海道幕別町)
- 「ふみの森もてぎ」ソフト&デザイン計画コーディネーター(栃木県茂木町)
- 「ゆいの森あらかわ」アドバイザー(東京都荒川区)
- 「ゆすはら森の中の丸ごと図書館建設支援業務」チーフディレクター(高知県橋岡町)
- 活字文化推進議員連盟「全国書誌情報の利活用に関する勉強会」実務者会議委員

図3 太田剛氏プロフィール

今日の話、「図書館で変わる！地域が変わる！」ですが、ここでちょっと注目して欲しいのは、「図書館「が」変わる」ではないのですね。「図書館「で」変わる」なのですね。この「が」が「で」であるところが、私は今日のテーマの「ソーシャルイノベーション」の根本的なところだと思っています。「図書館「が」」と、図書館を主語で話しているうちはなにも変わらないと思います。では、「図書館「で」」なにが変わるのかっていうと、「地域「が」変わる」。今日はこの「で」と「が」にちょっとこだわってみ

ていただきたいと思います。

お手元の黄色い冊子（『綴』通信』2号）ですが、私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」で、1年に1回発行している冊子です。本当は年に3回ぐらい出したいのですが、今、私は都内に月10日もないと思いますが、全国を飛び回っていて、余りにも忙しすぎて年1回しか出せない（笑）。最初が2014年11月の図書館総合展で配った創刊準備号のタイトルが「図書館の本来と将来を考える」。「図書館と地域をむすぶ協議会」ができたばかりのときです。当時は武雄市の図書館が話題になっていた頃ですね。どうも図書館の本来を忘れていないかと、もう一回図書館の本来を考え直して、将来を考えようよということで、このタイトルになりました。次の2015年に発行したのが創刊号で、タイトルが「地域づくりの核となる図書館」。私どもの協議会でも、幕別町図書館とか茂木町の新図書館などの事例ができてきて、われわれは「地域づくりの核となる図書館」を目指してやっというということで、こういうタイトルになりました。次の、昨年になりますね、2016年のタイトルが、「地域づくりの核になる」をさらに一歩進めて、「図書館でソーシャルイノベーション」になりました。ちょうどこれが1年前です。この1年で、「ソーシャルイノベーションと図書館」という話は、ガンガン流行ってくるだろうと思っていましたが、意外と来てなくてですね（笑）。「あれ？なかなかついてこないな」って思っていたときに、今回永田先生からお話いただいて、「ああ、やっときたか」と思っているわけですけど（笑）。

これは日経新聞の記事（2017年1月10日、[https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG09H3Y\\_Q7A110C1CR0000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG09H3Y_Q7A110C1CR0000/)）ですが、日本図書館協会さんがこういう調査結果を発表しました。少しびっくりしたのですが、「図書館をまちづくりの核に 497自治体が交流や就業支援の場」として位置づけてますよというようなレポートなのですね。このタイトルからして、日図協さんが「図書館をまちづくりの核に」とかいいたすとは思ってなかったの。しかもアンケートの結果は、497自治体がもうやっていますと手を挙げたと。中身を見ると「これ、まちづくりかい？」っていう案件もあって、どうかなという疑問もありますが、ただ一応497自治体が図書館をまちづくりの場だと考えていると考えれば、ここまできているんだって感じ入りました。さらに、明日からですよ、日図協さんの図書館大会。大テーマが「まちづくりを図書館から」とうたっています。「(仮)」ってなっていますけど、これでいくのでしょうか。日図協さんもこっちにくるんだって、ちょっとびっくりしているわけですけど。われわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」は、こうやって2014,15,16年と、段階を経て「まちづくりの核になる図書館」を考え続けて、「ソーシャルイノベーション」まできたのですが、次の今年、ちょうど編集中ですが、どういうタイトルにしようか、この先に何がくるのかと考えているところです。

今日はこのソーシャルイノベーションの話をして。先ほど永田先生から、ソーシャルイノベーションについて説明いただいたので、だいたい皆さんご理解いただいたかと思います。これは一つの定義ですが、日本財団の「ソーシャルイノベーションフォーラム」によると、「よりよい社会のために新しい資金を生み出し、変化を引き起こすそのアイデアと実践」、それがソーシャルイノベーションだと定義しています。その次が大事なのですが、ソーシャルイノベーションが多く「実践されることによって、本当の意味での持続可能な、みんながみんなを支える社会」が実現すると。つまり持続可能な、みんながみんなを支える社会をつくる、これがソーシャルイノベーションだといっています。

実は、われわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」はソーシャルイノベーションを目指してやっていたのではなくて、先ほどの茂木町の新図書館とか、これから話す幕別町図書館のシステム改修から始まったのですが、そういう図書館案件に関わるなかで、あとからこのソーシャルイノベーションという概

念を日本財団のフォーラムで知って、「われわれがやっていたことって、このソーシャルイノベーションなんじゃないの?」と、気がついたという感じなんです。

では、どういうつもりでやってきたかという、ここ5年ぐらい、いろんな図書館に関わりながら、相談を受けたり、話を聞きにいったり、いろいろ見聞きする中で、すごく感じたのが、この「今だけ、金だけ、自分だけ…でいいんですか?」(笑)。これ、ある本屋さんで平台を眺めてて、1冊だけ裏返っていて、この裏表紙の帯をみてドキッとしたのですが。これを「3だけ主義」といって、最近けっこう聞くようになりました。「今だけ、金だけ、自分だけ」、この「自分だけ」のところを「図書館」に変えたときに、「今だけ、金だけ、図書館だけ」でいろいろなことが動いている事例があまりに多いんじゃないのかと気がついたんですね。先ほどのソーシャルイノベーションの逆がこれだと思います。「今だけ、金だけ、図書館だけ」といえば、先ほどの茂木町の引越しもそうで、引越業者に丸投げすれば、今はそれでいいかもしれない。でも、業者さんを叩いて、段ボール代まけさせたりして(笑)、予算は助かったかもしれない。でもそれって図書館のためにはなっているけれども、市民のため、町民のためになっているかと考えたときに、少しやり方を変えるだけで、すごくおもしろいことができるじゃない?茂木町の例だと、あの引越大作戦を実行委員会方式にしました。その実行委員会の人たちが核になって、後に「ふみの森のこだまの会」という図書館のサポート組織ができました。今では百人以上のメンバーに拡大して、様々な図書館のお手伝いをいただいています。このように、当たり前に行っていることの、少しやり方を変えればいろいろなことができるんですね。

今日まず、幕別町で“図書館と地域をむすぶ協議会”がやった事例を、こういうプリント(図4参照)が皆さんのお手元に配られていると思いますが、この図を中心にお話をしてゆきます。



図4 幕別町図書館(北海道)実践モデル

(<http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/mbt4cycle.pdf>)

私が図書館に関わることになった最初、ことのはじまりは幕別町図書館でした。先ほどお話した、ミヤンマーの武装勢力をまわったり、世界中のハンセン病コロニーをまわったりしているときに、幕別町図書館の長谷館長さん、この方は企画畑などにいた方で図書館は門外漢でした。その長谷さんが、定年までの残り4年くらいの最後の花道として、図書館長になりました。幕別町はこういう（図4の中心の写真を参照）図書館で、春になるとタンポポが咲き乱れる美しい図書館ですね。この本館と、他に分館二つで約24万冊の蔵書数です。その門外漢の長谷さんが館長になってみて思ったことが三つあったそうです。一つ目は「なぜうちの図書館の本棚はワクワクしないのか」。「本屋さんの本って読んでくれ読んでくれて迫ってくるのに、なんでうちの図書館の本ってこんなに読まないでくれて顔しているの？」と思ったそうです。これ割と簡単な話で、図書館関係の方はわかりますよね。NDCは別にワクワクさせるためにできている体系じゃないので、NDCで分類配置された図書館の本棚は「読んで読んで」って迫ってくるわけじゃないです。実は、その前に選書の問題もあるのですけどね。二つ目が、「なぜ蔵書点検に1週間も10日も休んでいるのか」と。「普通の本屋だったらつぶれているだろう。そういうことしていいのか」と思ったと。三つ目は、「なんでOPACは、自分の館のなかの本の有無しか教えてくれないのか」と。「本来だったら、近隣の図書館、あるいは近所の本屋でその本が買えるかどうか、そこまでナビゲートしてはじめて地域の人に“本のレファレンスをするのは図書館だ”って胸を張れるんじゃないのか。自分の図書館のなかだけ案内していて、こんなんでもいいのか？」と、三つの疑問を持って相談にきました。

私も、当時は図書館の専門家じゃないので、そんな三つの疑問を持ち込まれても、ふーんって聞くしかない（笑）。では、ちょっと調べてみましょうかということで、皆さんのお手元の図の「発端、契機」になりますが、元々はシステム改修のお手伝いから入ったのです。先ほどの蔵書点検の休館日が長い話だとか、図書館間の相互連携とか、そのあたりの疑問はシステムでほぼ解決できると思いました。これはLENコード（カメレオンコード）というカラーコードなんですけど、幅3.2ミリくらいまで小さくできます。これを蔵書の背表紙に全部貼って、カメラで横にサーッと撮ると一気に蔵書点検できてしまう。幕別町図書館で全国初の全面導入に踏み切ったのですが、このおかげで蔵書点検の休館日はゼロにできました。問題は、ワクワクする本棚なのですが、NDCの分類配列を全部崩してやりかえるわけにもいかないので、このLENコードとセットで編集的な概念をもった蔵書管理システム（チェンジ・マジック）を導入して、いろいろな特集棚を自由にガンガンつくれるようにしました。

今日の話の本題はシステムの話ではないので、図書館総合展に来ていただければゆっくり話しますが、一応、LENコードと蔵書管理・書架編集システムで三つ疑問はほぼ全部クリアできたと。けれども、そのシステム改修の準備の過程で、いろいろなことがみえてきたわけですね。まずこのLENコードを装備しないとイケない。そのために、図書館が新しい本を買うときに、装備してくれる所をお願いに行く必要がある。ふたを開けてみたら、本は東京の専門業者から買っていると。どうして図書館のすぐ近くに地元の本屋さんがあるのに、そこから本を買わないのか？しかも、東京の業者にLENコードを貼ってほしいとお願いにいったら、断られました。フローが決まっているので、そんなめんどくさいことできないと。じゃあどうしようということになった。そもそも地元の本屋さんから本を買うのが筋だろうということで、相談にいきました。もう代替わりしていて、若い社長さんなんですけど、連絡していったのに迷彩服で「なにしに来た？」みたいな顔して出てきました（笑）。

いろいろ話を聞くと、図書館のすぐそばの本屋さんなのに、産まれてから一回も図書館に行ったことがないと。もう関係が完全に切れてるんですね。でも、形だけは書店組合から納入することになっていて、実際は東京の専門業者が発注を受けて、装備も納品も全てやっている。組合には2店登録されていて、納入された本の金額の5%がマージンとして組合に入り、お小遣い程度によくわからないお金が毎月入っているという。もう1店にも話に行きましたが、半分釣具屋さんようになっていて、高齢の店主にはとても電算化された図書館への納入はできそうもない。若い社長さんに、図書館でこういうことをやりたいので、地元の本屋さんから調達したいと説明すると、とてもできないっていうんですね。装備がネックになってできないと。本のフィルムコートですよ。

装備をまともにやると、1冊250円くらいかかる。1冊1,000円の本を売ると、もうけがだいたい210円から220円ぐらいです。図書館関係の方で、こういう流通のお金の話をほとんど知らない人もいますよね。「1,000円の本を本屋さんが売って、利益いくらか知っていますか」と聞くと、ポカーンて口開けてる司書さんが多い(笑)。これは知っといたほうがいいですよ。だいたい21%前後です。それで装備代250円もかかると赤字ですよ。1,000円の本ならまだいいですけど、文庫本とかね、600円の本で利益が120円くらいしかないのに、装備代に250円かかっていたら、もうやっつけていけないんですよ。「それはおかしいね」というのでいろいろすったもんだしている間に、その若い本屋の社長さんが自分で福祉施設をみつけてきました。就労継続支援B型といわれる福祉施設です。福祉施設で装備をやってもらおうというので、「ミラータイム」という小さな福祉施設ですが、最初は、図書館の司書さんたちが障がい者の皆さんに講習しました。アスペルガー症候群とか、発達障害とか、そういう方々なのですが、講習会は半日ぐらいで、ほぼ手順は覚えてくれたと。この写真は、講習が終わった後、みんなで自分で装備し終わった本を持って喜んでいるところですね。そこで、幕別町図書館の新規購入の本は、全部こうやって、福祉施設にやってもらうことになりました。就労継続支援B型なので、B型って1日一人5千何百円くらいの給付金があります。それで職員の人件費や施設費用に回すのです。工賃はそのまま障がい者の方の報酬になります。幕別町では、最初は書店が50円を負担して、フィルム代は図書館が雑費として負担して、三方一両損じゃないですが、書店も図書館も負担することで始めました。今までは全部東京の業者にタダでやってもらって、お金は助かった。さっきの「今だけ、金だけ、図書館だけ」ですよ。普通なら、これでよかったよかったとなるところですが、こうやってみんなで少しずつ負担して動かしはじめると、うまく回り出しました。

ちょうどこれがうまく回り出したときに、NHKの全国放送『おはよう日本』(2016年2月1日放送「特集 どうあるべき？公共図書館」)から取材の依頼がありました。ちょうど海老名のいわゆるTSUTAYA図書館さんがオープンしたときでした。その前に小牧市が大問題になって、市民運動で反対派が勝ってTSUTAYA図書館の計画は流れました。番組では、そういう経緯をレポートしながら、海老名市はオープンしましたが、賛否両論ありますよと。喜んでいる人もいて、行列ができていますが、委託費は3億3,000万となり、かえって高くなっていますねと。検索がわかりにくいとか、どこからが書店で、どこからが図書館かわからないと不満を寄せる人もいますと。これに対して、なぜかNHKさんは、こういう民間に丸投げの方向に向かっている図書館もあれば、幕別町図書館のように直営で地道に地域づくりをやっている図書館もありますとぶつけてきたのです。地元の書店から本を購入して、福祉施設で装備をやって、地域経済の小さな還流を起こしてますねと。NHKさんはどっちがいいとはいわないです。向こうは3億3,000万みたいな話で、こっちは1冊50円の攻防をしているわけで、比較されてもねえ

(笑)。けど、最後にスタジオにカメラが戻ったときに、スタジオの会話はかなり幕別町図書館を讃えてくれて、全国からの反響がすごかったようです。

幕別町の「ミラータイム」さんは、小さな一軒家で、6、7人がちゃぶ台を囲んで、正座しながら装備作業をしていました。装備って一人の人が1冊仕上げるのってけっこう大変ですけども、完全な分業制にしたんですね。切る担当は切るだけ、合わせる人は合わせるだけ、貼る人はひたすら貼る。そうやって分業すると、ものすごく作業が速くなりました。NHKさんが撮影に来たときも、20冊くらい用意していましたが、セッティングしていたカメラマンさんがOKですよ、本番いってくださいっていうと、もう終わりましたと(笑)。15分くらいでしたか？20冊くらいならできてしまうんですね。今は図書館だけではなくて、学校の図書室も福祉施設で装備をまかなっています。

それで、こんな狭い小さいところでちゃぶ台を囲んでやっていたのですが、図書館の装備って、必ず仕事があって途切れないんですね。それまで福祉施設にくる仕事は、なかなか継続しなくて不安定なんです。ときどきしか仕事がなかったり、季節的なものだったり。けれど、こうやって通年で必ず装備の仕事が継続するというのは、すごく助かることだということで、作業している人達も自信がついてくる。親御さんの話を聞くと、図書館のような、公共の社会の役に立っているっていうことは、本人たちにとっても、ものすごくうれしいことだったらしく、日に日に変わっていったというんですね。それで、「ミラータイム」の社長さんも自信がついて、分厚い申請書を頑張って書いて、助成金を得て、この写真のような立派な工房を建てちゃった (<http://millertime.web.fc2.com/>)。今は、この写真のような広い部屋で、机に座って装備をやっています。しかも、装備作業を担当しているメンバーの中に、エース級が二人いて、一から十まで全部工程をこなせましたが、この4月に民間の企業に就職できました。

結局、これは大きな目でみると、さっきいったように1日5千何百円の給付金、これって税金ですよ？その税金が使われていた二人が、納税者になったわけですよ。幕別町全体からみると、ものすごく大きいことです。装備は装備とってそれだけを切り出して、それがサービスでついてくるからと、東京の業者から本を買っている。地域の本屋さんが今どんどんつぶれていますよね。1日何十軒というペースで消滅しています。そんななかで、幕別町図書館の資料購入費は、だいたい800万ですから。そのうちの約20%っていうと160万ですか？本来は町の本屋さんに入るはずだったお金が、全部東京の業者に吸い取られている。装備がタダだからっていうけれど、その装備を福祉施設に回すことによって、そうやって何人もの障がい者と呼ばれる方々が、生きがいをもって仕事をして、結果として一般の企業にも就職できた。これ、全体をみれば、すごい人材育成のインキュベーションシステムですよ。図書館としては、二人がいなくなってすごく痛かったのは確かで、3ヶ月くらい装備が滞りました。でも、3ヶ月したら新しいメンバーが育ってきて、今また完全に回っていると聞きます。

このように、それまでは全部お金で解決して、装備をタダでやってくれるからって、東京の業者から本を買っていましたが、今は地元の本屋さんが、毎日のように図書館に来て、次の図書館まつりどうしようとか、今はこんな本が売っていますよとかっていうのを司書さんたちと情報交換して、一生懸命図書館づくりをやってくれています。こういうのが私は、一つのソーシャルイノベーションなのかなと思っています。小さな地域の経済循環を起こしながら、人材育成もできるという。

そういう事例を幕別町で進めていたところ、皆さんのお手元にも答申書(出展:「これからの全国書誌情報のあり方について—いつでも、どこでも、だれでも使える—(答申)」。 [http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615a\\_jpoinfo.pdf](http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615a_jpoinfo.pdf)) を配りましたが、超党派による活字文化議員連盟の「全国書誌情報の利

活用に関する勉強会」で実務者会議の委員に呼ばれました。これは MARC の問題についての答申書なんです。この全国書誌情報というのは国立国会図書館が無償で出している MARC です。この全国書誌情報をつくるのに、人件費だけでも相当かかっていますよね。少なくとも億にはなりそうですね。なのに、今、国立国会図書館の全国書誌情報を全面的に使って、MARC 費用をタダで運用している公共図書館はほとんどない。図書館によっては 300 万とか使って民間の MARC を利用している。幕別町でも 100 万以上かかっていました。国が多大な予算をかけて、無償で提供している MARC を使わずに、公共図書館が何百万、何十万という予算をかけて民間 MARC を買っている。これは税金の二重取りじゃないですか。この超党派議員連盟の勉強会でもそういう話をしました。さらに、この答申書の中で問題視しているのは、ある民間 MARC の利用が決まると、今の図書館は電算化されているので、選書、発注、納入、検品、管理まで、一気通貫で決まってしまうんですね。そこに地元の書店が入る余地がない。MARC を決めた瞬間に全部持っていかれてしまう。しかもここに装備の問題がからんでいる。なので、この答申では、それを一回切り分けなさいと。それで一つ一つの問題を考えて、クリアにしていきなさい、というようなことが書いてあります。この答申を受けて、勉強会の実務者会議から作業部会という形に移りまして、具体的な課題の解決方法を議論する中で、JPO（日本出版インフラセンター）が出している新刊情報ですね、これは各出版社が出す情報なんです、早いもので出版の半年ぐらい前から情報が出て来ると聞きますが、それを国立国会図書館から全国書誌情報と同じフォーマットで提出すればいいのではないかと。公共図書館がなぜ全国書誌情報を使わないのかというと、アンケートをとっているのですが、遅いからという理由なんです。確かにそうだと思います。納本主義といいますか、出版社から納本されて、MARC をつくるわけですから。ひどい出版社になると、半年後にもって来たりすると聞きました。それでは遅すぎますよね。だったらその遅いという理由を外しましょうというので、JPO の新刊情報を公共図書館でも使えるようにしましょう。Amazon が使っている情報が JPO の情報ですよ。国立国会図書館さんもやりますよということで、おそらく来年の 4 月以降のどこかで、国立国会図書館さんから新刊情報を無償で落とせるようになります。しかも、JAPAN-MARC のフォーマットで取れるはずですから、それを公共図書館のシステムに落としておけば、予約も取り始めることができますよね。先行して発注もできるかもしれない。システムが API 連携でつながっていれば、後から詳細な JAPAN-MARC が仕上がってきたら、シームレスでそれを取り込んで、新刊情報と入れ替えることも可能です。作業部会では新刊情報を元に、選書をして書店への発注書まで作成することができるシステムを開発しました。ここまで用意したら、もう遅いからという理由で国立国会図書館の無償の MARC を使わず、高い民間 MARC を使う理由は無いかなと思います。

このように装備の問題も、MARC の問題も、これまでのセオリーを一回外して考えて、ソーシャルイノベーションという視点で、「今だけ、金だけ、図書館だけ」という閉じた考えは捨てて、地域を含めた形でしくみを考え直したら、新しい展開が可能なのかなと思っています。先ほどの答申書ですが、もう一つお手元にお配りしたのは、この答申書に資料として付けられた“幕別町モデル”を説明した資料です ([http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615b\\_jpoinfo.pdf](http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615b_jpoinfo.pdf), p.16-17)。図書館システムと MARC を最適化して、本は地元書店から買って、装備は福祉施設と連携して、そこに地域の多様な人材を活用してゆくことによって、今まで当たり前のことだと思って、ずるずるとやっていたものを、もう一回ソーシャルイノベーション化する。そこで人が育つ、あるいはぐるっと地域の小さな経済が回る。これによって地元の書店さんがなんとか生き残れる、まだ頑張れる。私は地域の読書環境は、地元書店と図書館が手を組

まなければ守っていけないと思っています。図書館は図書館で揃えるべき本がありますから、図書館が駅前の書店に並ぶような売れ線の本ばかり並べてどうするんだと。だから本屋大賞に必要以上にうかれる図書館ってあんまり好きじゃなくて(笑)、それぐらいは本屋さんにまかせなさいよって思うんですけど。図書館には、図書館法にあるように、教養を担保するという使命がありますから、そのために入れなければならない一般書や、場合によっては専門書、あるいはいけないレファレンスブックとか、いろいろあるはずですよ。限られた予算の中で、どこの書店でも手に入るような流行本を入れるのは、ちょっと疑問なんですけど。本がいくらでも売れた時代ならともかく、今は地元の本屋さんと図書館がちゃんと手を組んで、役割分担をして、地域の読書環境をどうやって守ってゆくんだ、そこでどうやって経済を生み出して、なによりも読書を楽しむ人材をどうやって育ててゆくんだと、本気で考えないといけないと思うんですね。それがこういう装備だの、MARCだの、目先の予算削減みたいは話でおざなりになっていると、どんどんもう地域の読書環境はやせ細ってゆくと思うんですね。これこそソーシャルイノベーションの視点が大事な話だと思います。

このように、“幕別町モデル”といわれている図書館改革は図の右下(図4参照)のところまで進んできました。図の中にあります「サポート組織づくり」というのは、どういうことやっているかっていうと、幕別町図書館ではWebサイト(<http://mcl.makubetsu.jp/>)も同時に全面リニューアルしました。そのために図書館のロゴマークもつくってあげました。Webサイトのデザインは、幕別町には日本を代表するグラフィックデザイナーの田中一光さん、残念ながら2002年に亡くなりましたが、おそらく唯一デザインした緞帳があったのです。幕別町の百年記念ホールの緞帳ですが、十勝の風景をそのままデザイン化した素晴らしい作品で、そのデザインを踏襲したWebサイトのトップページにしました。

また、このWebサイトには長谷館長にぜひやってほしいと頼まれて、蔵書管理システムと連動したバーチャル本棚(<http://mcl.makubetsu.jp/index.php/2014-03-26-11-05-05/285056-2014-03-25-11-28-28>)というシステムも実装しました。選書したリストからWeb上で公開出来る本棚表示を自動生成してくれるシステムです。幕別町図書館には、森村誠一さんとか福原義春さんが、読み終わった本を送ってくれている「北の本箱」というコーナーがあるんですね。いろいろ紆余曲折あった末に、文化人が皆さん置き場がなくて困っている本を送ってくれたんですね。この本棚がすこぶるおもしろいんですけど、その中でも森村誠一さんと福原義春さんはいまだに送り続けてくれています。その本棚もバーチャル本棚でWeb上に公開しています。こういうWebサイトの運用に、人材育成をかませて、サポート組織づくりにつなげていこうと考えています。例えば、「あの人の本棚」というコーナーでは、ネギ農家のおやじが普段どんな本読んでるの?とか、図書館の裏に山本商店というユニークな雑貨屋さんがあるんですけど、そこのおやじは普段どんな本読んでるの?とか、消防士さん、看護師さん、魚屋のおやじとか、そういう人たちの本棚を、森村誠一さんとか福原義春さんとかと、全く同じシステムで提供しています。

こうやって人を徐々に多様な人材を巻き込みながら、「まくべつ BOOK サポーター」というのを育てています。略して「まぶさ」と呼んでいます。「まぶさの女」「まぶさの男」とかね(笑)。こういう「Editまくべつ〜編集力養成講座」(<http://mcl.makubetsu.jp/index.php/events/286240-edit-mabusa>)ということで、毎月、私が北海道に行って、リアルな講座を5回やりました。その間に、ネット上でお題を出して、徹底的に添削します。その講座で編集力を身につけた人たちが、「まぶさ」デビューするわけですね。このように新聞社の記者さんにも取材してもらって、記事にしてもらいます。この写真は地元の歴史家の方の話を私がインタビューして、それを「まぶさ」の卵の皆さんにまとめてもらうという講座の様子で

すね。本棚編集も教えます。さっきいった NDC の分類が中心の棚では、破綻して崩れていくところなどを取り出して、文脈的な並びの棚を新しくおもしろくワクワクさせるように組んでみるというような講座もやっています。卒業するとういう修了証とともに「まぶさ認定証」が渡されます。「まぶさ」のなかでも、特にこの編集力要請講座を修了した方は、LED としてですね、図書館エディター (Library Editor) としてデビューします。さっきの山本商店のおやじも、「まぶさ LDE」になりました。あと、実はこのなかに、地元の新聞社の記者さん二人も入っています。このように養成講座をやりながら人材、編集力のある人を育てて図書館の運用に組み込んでゆくわけですね。この写真は、その「まぶさ LED」が頑張ったハンセン病の企画展の様子ですね。私は日本財団さんの仕事でハンセン病に関わっていたので、ハンセン病のパネル展もやりました。今、こういうハンセン病のパネル展やってみたいという図書館さんがいらっしやったら、図書館と地域をむすぶ協議会でコーディネートしていますので連絡下さい。日本財団さんから預かった世界のハンセン病の写真パネルを無償でお貸しできます。これは小説『あん』を書いたドリアン助川さんですね。樹木希林さん主演で映画がヒットしましたね。「まぶさ」の方々がインタビューして、それを図書館 Web にアップしたりしました。

このように図書館サポーター組織を育てているところまでできているのですが、幕別町図書館では、最終的にサポーターもできて、次の段階に入っていて、図の右上 (図4参照) にあるような新しい社会モデルをつくるような、予防医療とか医療負担の削減とか、自治体の抱える問題に図書館が積極的に関わっていかうということですね。このペーパーの裏側にですね、「知る・読む・笑う～図書館を核にした活字と笑いで活気あるまちづくり事業」というのがあります。 ([http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/stress\\_rakugo.pdf](http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/stress_rakugo.pdf))。これは、図書館にストレス測定器を置いて、利用者にストレスを測定してもらって、ストレスケア本を 500 冊くらい用意しています。もしストレスの数値が高くて、真っ赤っ赤になっちゃった人は、医療系の本をちゃんとレファレンスします。黄色ぐらいの人は、猫の写真集とかね、癒し系の本をすすめます。図書館の本は 2 週間後に返しにくるんで、そこでまた測定すれば、定期的に継続して測れるわけですね。実はもう一つ大事なのが、測定時のスタッフとの会話のなかに、例えば、青で全然ストレスなかったおばあちゃんが「そんなわけない」と、「うちの嫁は…」ってしゃべりだすわけですよ (笑)。そのなかに、ものすごい多様な町の問題が含まれているんですね。貧困の問題だったり、DV の問題だったり、いじめの問題だったり。そういうのを、幕別の司書さんたちがカウンターで察知して、行政の窓口につなげてゆくってことをやっています。これはストレスケアレファレンス研修の様子ですね。そういうストレス測定やストレスケアをやって、さらに落語会もやります。歌丸さんが会長の落語芸術協会さんと組んで、笑いが一番ストレスケアにいいというのは論文がたくさん出てますからね。ストレスに弱い臓器って、腎臓なんですよ。それで、透析患者一人いると、町の負担が 500 万だそうです。二人いると 1,000 万ですよ。幕別町図書館の資料購入費が 800 万ですから、二人ケアできれば、もとがとれるわけですよ。四人ケアしたら 1,000 万増やしてくれって町長に言おうかと (笑)。要はそうやって図書館でなにかやることによって町の経済にもう一回還元して還ってくる。これまで町のメインストリームから外れていた図書館を、まちづくりの中心にもってくるということで、こういうことをいろいろやっています。

茂木町の事例も同じような考え方で、茂木はもう町の本屋さんがなくなっていたので、日本一ともいわれる道の駅にツーパンの小さな本屋さんをつくって、その本屋さんから図書館に入れる本を買うようにしました。道の駅が第三セクターですから、いわば町営の本屋さんですね。装備も社会福祉協議会の福祉

施設と連携してやっています。今、梶原という、高知県の山のなかにある人口 3,600 人の町で、隈研吾さん建築設計の図書館をつくっています。建築中なんですけど、この CG のような図書館ができます。ここでも我々が、ソフト部分を全部コーディネートしているので、高知市内の書店さんと組んで、福祉での装備でやる予定です。海洋堂さんにジオラマをつくってもらったりもします。

このようにわれわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」はいろいろやっていますが、この名前ですね。「図書館と地域をむすぶ協議会」は長すぎて呼びにくいので、「図&地」協で「とんち」協って呼んでいます。実は、この「図」と「地」というのが大事なんですよね。code と mode です。情報には必ず「図」の情報、目にみえている情報と、「地」の情報、背景の見えない情報があります。ソーシャルイノベーションというのはこの図と地、code と mode の関係をひっくり返していくものかなと思っています。なので、図&地で「とんち」って、だいぶ気に入ってますので、どこかでみかけたら、ぜひ「とんち協」って呼んでくださいね（笑）。最初にいった「図書館で変わる！地域が変わる！」というのは、図書館で地域が変わるということなんで、主客、主語と述語をひっくり返す、図書館を主語で語らない、必ず地域を主語にする。図書館を述語的に扱ったときに、どうなるか。自分のことは後回しにする、図書館のことを後回しにして、まず地域のことを考えたときに、なにができるのかなというのを考えたらいんじゃないのかなって思います。そのために「今だけ、金だけ、自分だけ」でいいんですか？ということ問いかけ続けたいと思います。

皆さんのお手元に資料がありますが、今日は 45 分しかなかったのですが、11 月の図書館総合展での「とんち協」のフォーラムでは 90 分フルでしゃべります。もしよかったら来てください。あと、埼玉福祉会のフォーラム、これも 90 分で大きいホールでやります。佐藤聖一さんという埼玉県立の久喜図書館にいらっしゃる、全盲の司書さんです。去年やってあまりにも好評だったので今年もやるのですが、これも全く同じ話ですね。主客を転倒して、今まで障がい者と思っていた人を、ひっくり返して述語的に見たときに、図書館でなにができるのか。あとはメディアドゥさんのフォーラムでは和歌山県的那智勝浦でやっている文科省さんの教育格差解消のためのモデル事業の話をして。読書習慣を身につけるコースウェア開発をしています。有隣堂さんのブースでは、AI 研究者でビブリオバトル発案者の谷口忠大先生と「ロボットに本シェルジュがつとまるか」という対談もします。もし興味がある方はみてください。ということで、ありがとうございました。

---

---

(永田)

ありがとうございました。ではひきつづき、宇陀先生お願いいたします。

---

---